

からりと晴れたなかに  
 一つの濁つた音すらしない  
 みなよく透つて朝のやうに新しい

## 書 齋

精神的な仕事をするものには  
 静かな書齋がいる  
 よき書齋は心をあたためる  
 よき書齋の内にもつてゐる間は幸福だ  
 亂れない整へられた自分の心が  
 永遠と完全とに

日夜向ひ合つてゐる

私は友の書齋にはいるとき  
 そこが清く整へられてゐると落ちつく  
 そこに安らかな友の心があるからだ  
 そこに彼等が仕事に燃えてゐるからだ  
 そして私は私の書齋にかへつて座る  
 いま受けいれた平和のつづきが  
 しつとりと私を充たしてくれる  
 わたしは冬にはいつてから  
 北窓から流れこむ冬の光を愛した  
 寂しい冬の光は

毛皮の敷物の深い毛並にさし込んだ  
わたしは冬の光を見てゐるとあたまがよくなる

人にも私にも書齋がいる  
またはすべての人人にとつて家がある  
人は休養と愛惜との日没に  
すがすがしい香氣ある夕べをむかへるために  
清く静かな書齋がいる

### ある夜明

朝はやく庭へ下りると  
まるで山間の夜明けのやうに  
冷たい夥しい露が  
重く土の上にたまつてゐた  
まだ日はのぼらない前  
私は生きもののやうな土が  
だんだん空の明るみに呼吸してゐるのを感じた

### 祝福されるもの

生きて啼くものの楽しさ  
この世に亘つて

深い寂しさにしみ入つて  
 啼きつくすものの美しさ  
 人人の胸から胸につたはり  
 草木のゆめをふかくする  
 いじらしい生きもの  
 私はこれらをいま祝福する  
 そのみぢじき生命をたたへる  
 ひと雨ごとに衰へてゆくいみじさ

みな休息して

夕方になると  
 白いかもめの群が  
 隅田川の方をさして渡つてゆく  
 空の澄んだ日は  
 くつきりと浮彫りにされて  
 優しいつばさの音まで  
 はたはたとときこえて来る  
 毎日のやうに規則正しく  
 夕方になるとそれが見られる  
 いつも一日の仕事が終つて  
 庭で休むとき  
 はたはたと渡つてゆくのを見る

## 街にて

自分に悩みや苦しみがあることに  
街から街を歩きつづめる  
街をあるくとき全心燃えるやうになる  
苦みが一層苦しくなるのだ

件上街味まじり市街味あふま

冬

僕はこの冬の一月

露西亞を亡命して来た  
若いスカルスキイといふピアノニストの  
その音楽をきいたとき  
露西亞の平安が一日も早く  
やつて来るやうに祈られた  
その微妙なピアノニシモの瞬間  
それはまるで露西亞の中流の客間の  
一部をうつし得たやうな  
ファミリアルな音楽の會合であつた  
會場を出てからも  
靴の底も氷るやうな思ひで  
凍える街區を私は昂奮しながら歩いてゐた

吹きつゝのる風ときびしい冬とを  
窓のそとに控へた會場の美しい空氣！

花 音楽

そして冬

自分はその夜を忘れることができない  
その夜は永く頭に残るだらう

### たのしい宇宙の響蕙

益益深く内にこもる事は

實に立派な心をそだてることだ

城のやうな

何物も動かすことのできない楽しい孤獨を生むことだ

本當の頂上にまで上りつめると

孤獨は楽しみ限りないものだ

そこから人類の生活がまるで手にとるやうに

空から見下したやうに

はつきりとししかも個人と個人との意志の分れゆく様や

その動機や戦ひの諸諸まで見えてくるのだ

都市の町や家まで

一枚の圖面をひろげたやうに  
 動くものは動くものと一しよに  
 規律正しい生態を続けゆくのがわかる

まことに個人の生活が續けられてゆく微妙さと  
 必然的な運命的平等とが  
 あたま並みに與へられてゐることを感じる  
 皆自己の生活を守護し  
 あるひは増益してゆく激しさは  
 勝つものに勝つ喜びを與へてゐるさまは  
 實に愉しい限りだ

町や家や附屬するものが  
 整然としかも永久に安逸的に  
 宇宙的な恐怖をも感じずに動いてゐる  
 營み勵んでゐる  
 宇宙の破滅やそれらの信憑すべき論據が著はれてある  
 に係はらず  
 必然さうあるべき人類の運命であるに係はらず  
 その恐怖すべき「時」を冠されてゐるに係はらず  
 しかも堂堂と生活の行列を死の一瞬にまで引きのばし  
 繼ぎゆくことを考へると  
 實に愛すべき美しき魂の群であるかが判かる  
 欲望が眞理に伴つてゐることに驚かされる

生むものは

生もうとしてゐるものに

よき種子とよき芽生とを期待し

二つの性はうたひながら睦み合ひ

野や山や海濱や或ひは人家の一隅に

たくましい接吻の響を立てる

生命のうたに憧れる

決して宇宙に恥ぢない律をつくつてゐる

一つの君主をつくりあげ

その君主のもとに蟻のごとく働き

しかも悉く律法の精神に劣ることはない

二つの鍵のやうに正しい

自分はいま何者にそむく心や

その根本に疑義をもたないで肯定し瞰望する

あるがままな最上な

ゆるがせない月日のまはつてゐることを思へば

人類をとりまく自然の精神をも

自らなる恵與に

あふるる寛大と必然とを感じる

何事も起るな

このまま人類のゆめを奪つてゆかないやうに

たとへ戦ひがその全核につき上つても

平和になることは決定してゐる

この宇宙の大きさに守られてゐる間

みな勝つもの強きもの劣るものとも一緒に  
 永くその生命を持することが出来るのだ  
 自分は瞰望し愉しみ限りない  
 まるで一枚の圖面のやうに  
 静かに保たれてゆくさまは自分を喜ばし  
 また歌はせる

### よき心に照されて

まづしい中に育てられてゆく  
 他をそこのではない平和が  
 自分をかためてくれる

人人は心を安らかにして私を見る  
 私どもに柔らかな心をひらいてくれる  
 その心に照されて  
 心から微笑をもらしてこの世に對する  
 温良な泉をあび羽ばたくやうだ  
 心の平和がかためられて來たのだ  
 戦つてゐる間に平和が收穫されて來たのだ  
 いまこそ深い挨拶を自然に交はす

### 一つの陶器

一つの陶器を据えて見てゐると



その底の方に微妙な音をひそめてゐるのがけさはあきらかに

私の胸につたはつて来る

貝類に耳をあててゐるやうだ

そのまるい柔らかい底から

限りもしれない泉が湧くやうだ

ひたひたと心を濡らしてくるのだ

愛陶の精神がけさは美事に感じられて来るのだ

静物の美しさに見とれて

しばらくは安まるのだ

その開いたふちに

映つてくる空は實によく調和する

私は暗れた朝の机の上で

一つの古い陶器を眺めてゐる

### 月を眺めて

夜中に目を覺まして

庭に下りると月が私の家の

その真上にすわつてゐる

あるだけの光がそそがれてゐる

地は光にうたれて濕つてゐる

いままで静かに眠つてゐた自分の家

私がひらいた雨戸の音は  
夜の葉の上を互り

月の中心にまでとどいてゆくやうだ  
かしこにもまた河者が居て  
見下ろしてゐるやうな微妙さが来る  
その明るさは未来の心をひらく

その美しい光の團欒

つきない光の泉

絶えず人人の心にいり込み

永い生涯のつづきを考へさせる

光のはげしさ新しさに

そのちからに今宵も私は抱かれて

ねむりの内も起されて

底にたたへられた激しさに追はれて

しづかに庭をあるいてゐる

## 草 原

僕はしぐれの季節が好きだ

やや枯れはじめた草原などで

203  
あるかないかの雨あしをしらべるとき

定まりのない心は何にたとへていいかわからない  
 深い田舎の秋にはそれが多い  
 さういふとき人間の心は優しさに深められる  
 心は時計のやうに敏活まじりふかくなるのだ  
 私は國にゐて  
 くらい座敷の一角に机を据えて  
 よくその音をきいた  
 いまもその時雨の音がきこえる

### オブローモフの生涯

秋の日の穏やかな午後

優しい風に吹かれて  
 自分はしづかに憩んでゐた  
 家のそとの空はときをり  
 うすい日ざしになつたり  
 ぱつと明るい花にあたつたりするのを  
 ゆめのやうになつて眺めてゐた  
 自分はいつの間にかマトウエーウナを  
 オブローモフのことを考へてゐた  
 オブローモフの懶怠な生活が  
 この秋の穏やかな午後に關係があるやうに  
 あの静平な生活を目に浮べて考へてゐた  
 マトウエーウナのやうな善良な女性の胸に静かに點れ  
 てゆく愛の火を

206 私はしみじみ考へてゐた

### 感想詩

人はこの世の終りに近づいたとき  
きつと人間の生活の中に  
一番よい心に立ちかへるにちがひない  
あの静かな老年期の寂しい精神の泉に  
なみうつてゐるものは  
この世の悉知と感謝とに燃える波だ  
すべての夫妻が老ひて一つの實をつつむ  
厚い外皮となるやうに

本當によき心と心  
魂と魂とをとり交はすにちがひない  
神に近い人間の老年期は美だ

### 生活の頂

207  
自分は三十にして  
雨のごとく力加はることを  
その生活の頂點まで想像して初めて生きられる  
小さな言葉を挿むな  
仕事をやり通すものは目付からちがふ  
はちきれる世界に

ダルなゆめを見ておられない  
 お世辭にも  
 微笑にも  
 今は飽きはてたのだ  
 正真正味な人格で戦つてゆく生きてゆく

### 三月のある晩

ある晩

私は電車に乗つて散歩に出かけた  
 私のすぐ向ひの席に  
 陰氣に座つて

永い間俯向いてゐる婦人がゐた  
 私は間もなく  
 彼女が啜り泣いてゐることを知つた  
 夕飯後の忙しい時刻に  
 この人妻らしいひとは何處へ行くのか

しかも泣き濡れて  
 不斷着のまま  
 とり亂した心をその總てにあらはして

私はしばらくすると

はつとした

一切が直覺された

私は急に蒼白になつた

この婦人は愛に離れて來たのだ

——彼女は泣き叫んで家を飛び出した  
新しい苦しみ惱みの餌食になるために  
荒れたものをもつと酷くするため——

しかし自分はまだ彼女が悔ひ初めてゐることを知つた  
とどめがたい涙がそれを表はしてゐる

永い沈思によつて

心が平らかになり初めてゐる

その心は美だ

その顔はもう後悔に輝き出した

善良に

最も眞實なる一瞬に——

私はあやふく語らうとした

おかへりなさい

あなたの夫はもうあなたを許してゐる

そして灯のしたに座つてゐる と

しかし私は唇をとぢてゐた

彼女は降りた

どこもかしこも温かい三月の街路に

彼女の悲しみはつらかつたにちがひない

## 街 にて

自分は美しい女性を見ると

この人は幸福になれるかと思ふ

この人に強い男を與へ

はげしい貧しさにならしめ

雨の中を歩ませ

悩ましたら

このひとの美しさはどんなだらうと思ふ

このひとによき書齋を與へ

その瞳を活かしたら

このひとの完全さはどんなだらうと思ふ

## 休 養

庭へ椅子を持ち出して

僕は正面に

温かい日光をあびてゐた  
 小さい花壇のまはりには  
 一切の芽が吹き出てゐた  
 まるで一切に天にむかつてうたふ子供らのやうに

自分は一瞬の日光をむさぼり吸ふやうに  
 永い讀書のつかれから伸び上るやうに  
 椅子の上に深く座つてゐた

もう蟻が出た

地上のつはものの正しい生活が  
 しかも宇宙の律によつて初められたのだ

## 地上の春

人人の性格がなぜかうも荒くなるのか  
 人人はなぜああも冷酷に歩み行くのだらう  
 つもる塵さへ春らしく煙る街上に  
 荒い素のままな  
 厳つくだいたましいゆがみを見せた容貌が  
 いくつも私のあとから  
 あとからと来る



刺されたやうな目付に優しさは見へない  
その額は蒼ざめてゐる

私はいま見る

割れたやうな感情の曇りを見せた人人の  
どうにもならない荒い悲しみに  
つかれて歩む日日の姿を見る

あれらの人人にも

やさしい生活がとりまいてゐたのだらう  
しかし今は背後からも前から

人間とともに荒くなつた自然を見るにつけ  
かれらにはああいふ荒さを容貌に加へた  
ギチギチに迫られて凝固した

人人よ

もう少し静かに優しく

心に濕ほひをもつて

この春の地上にふさはしく歩かう

そのギチギチな

いかつい表情のなかにも

いまは温かい感情をあらはしたまへ

## 春の雪

雪のふるのを眺めてゐると  
 心はあざやかに羽ばたくやうだ  
 私はこのやうな日  
 とりとめもなく窓硝子からそとを見てゐる  
 私は茶をのんだり  
 温かにのぼる湯沸しに近く座つて  
 家中をしづかにさせ  
 一人はげしい雪のふるのを眺めてゐる

雪は交はり深い姿で  
 美しい白鳥のみだれた姿を見せる  
 雪は生きもののやうに  
 見てゐてもたまらないほど面白く  
 天上の泉から降つてくる

雪のふる日は  
 くだらない人人の心も  
 また喧ましい小供等も静まると見へる  
 みなだまつてゐる  
 雪のふりつもるおとを聴いてゐる

梢からは

たまりかねて雪がはねられる

あたたかい音がする

羽音のやうにやはらかい音である

私は机にむかつてゐる

降つてはつもり、つもつては降る

はげしい雪をながめて居れば

自分が降りながら喜んでゐるやうだ

決してさむくはない日

この美しい白鳥のむらがりは

私の窓をうづめてたはむれる

### 苦しみ悩み

一人づつが妻をもつて

その性慾を極限し整へてゆくことは

この邪悪な世界の中にあつても

他の動物に劣らない

人間としての一つの正しさだ

これのみは感嘆できる

人間一人づつの性慾が整調されなるときは苦痛だ

實に悩ましい

しかし性慾の整調されてゐることは

實に寂しく味氣なく  
 さきの日の苦しみをまだしもと考へる  
 かの日の苦しみを願る氣になる

### 冬の晩方

静かにしてゐると  
 幽遠な冬がいちどに下りて來るやうだ  
 人家のあたりに今まで騒いでゐた子供等の  
 その聲や歌がはたと止んで  
 まるで蓋をしたやうに  
 地上は暗くなつてしまつた

ぞくぞくした寒さだ  
 針のやうに顫へてゐる空氣だ  
 氷がめしめし張りつめられてゐるやうだ  
 障子が藍色にみえる  
 寂とした晩だ  
 電氣のしたで本をひろげて  
 読みかからうとして  
 ふいと静かなあたりをふりかへる  
 寒さは人の耳を澄まさしてくる  
 だれも來ない  
 からだがある一點に  
 實に微妙なある一點にちつとしてゐる  
 世界の冷厳な涯に壓しよせられてゐるやうだ

寒  
土

目をとぢてみると解る  
 厳しい寒さが  
 たえまなく落ちてくる方向が  
 ありありとわかる

深淵のやうな天のそこから  
 ばちばちと星が流れる  
 見たまへ

かはりなく  
 日に夜に新しく生れる  
 星の美しさ！  
 その冷厳さ！  
 永久に信じられる立派さをもつ實在だ

## 毒矢の立つた花

225  
 會つて許されなかつた罪がなかつたやうに  
 どういふ罪惡の芽をもそだてる社會だ  
 この社會に一點の清淨を保留することの寂しさ  
 しかし何といふ美しい潔よさ！

その目のきれいさ！

悪の道には悪の花があるやうに  
 よい道にはよい花がある  
 その花をつみとることも生れつきだ  
 みんな自由だ  
 しかし毒矢の立つた花はつみとるな

## 心

一つの心を心として築きあげるとき

へらべるものもなきまでに高めるとき  
 私はいつも偉きな安心を感じた  
 心にゆるみをもち  
 小さく譲り合つてゐるときは寂しかった  
 私は高きに昇る心を養ひ初めた  
 心を心として  
 あくまで自由にそだてることは  
 いつも私を大きくした

第二の故郷

—寂しき都會抄—

「寂しき都會」は、都會のなかにある極めて小さな生活にちがひないが、その影のやうなものや小さな私自らの生活や、また私をとりかこむ自然などを、ノオトに記したままのものをここにあつめた。

## 龜

いつのことだか覚えなないが

私はあるお寺の池で

珍しさうに日南ぼつこをしてゐる龜を

うつとりと眺めこんでゐた

かぜのない穏やかな日であつた

温かい自然木で作つた柵にもたれて

だんだん乾いてゆく龜のせなかを見詰めてゐた

龜のせなかは古い石垣のやうに

すこし青みがかつた飴色をおびて



あたたかい日かげのなかに柔らかさうに  
持つたらしくすれさうに見えた

龜はあたまも足もなかつた

みな甲羅のなかにこんもりと潜ませ

誰もしらない世界に閉ぢこもつてゐるらしかつた  
そのまま

何處へでも投げ出されてもかまはないやうに  
ころころになつて

なかなか動かうとしなかつた

龜は何んだか考へ込んで居さうに思はれた  
そのあたりの空氣の色まで

變色してゐるやうで恐ろしい氣がした

それは絶対に音といふものがしない日で

お寺のそとも内もしづまり返つてゐた

私はすこし眠いやうな氣さへし出した

私は柵のそとから

こつそりと手を出して

非常に淫らな氣もちになつて

龜のせなかをそろそろとなで廻した

龜のせなかはつるつるしてゐて

皺のよつたところが

糸を張つたやうに指さきにふれた

そのとき私もどきりとした  
 龜はびつくりしたらしかつた  
 空氣はもとのままな平明ないろに變つたやうな氣がし  
 た

私はそれから永い間

やはり柵にもたれて龜を見つめてゐたのだ

どれ位佇んでゐたかわからないが

龜はそつと首を出した

そのくらい目を上げて

まじまじと私を見たとき

龜が私の考へてゐることをすつかり先刻から考へあて

たやうに

くつすりと微笑したやうにおもはれた

淫らな淫らな私の考へてゐたことを

私もおもはず龜がさつきから考へてゐたことがわかる

やうな氣がし出した

どこか靈的につながつてゐる哀れな生きもの同士の

とても偽ることのできない言葉が

はつきりと囁やかれ合ふのをかんじた

そのさきの尖がつた頭が

ぬつと私の目のまへにつき出された瞬間から

ほんとうに静かな日であつた  
 龜は間もなく首をすつこめた  
 日はをしげもなく温かく注いでゐる  
 さうしてそこらに櫻の花が一杯に固まつて咲いてゐた  
 やうに覺えてゐる

### 地に燃える

烈しい寒ざらしのかぜのふく朝  
 ゆきずりに私は恐ろしいほど美しいものを見た  
 どこの女かしらない

寒さにさらしつくされたやうな頬をして  
 眞赤にほてらして  
 ちからをあるだけの内體からだにこめ  
 とつとつと歩いてゆくのだ  
 その頬は實際燃えてゐる  
 うちがはから湧きでてゐる紅みだ  
 寒風なんぞは何んでもなく見える  
 そんなものをうけつけない濃密な皮膚だ  
 しつとりと香料のやうな光さへ見える地だ

寒さがすればするほど  
 霜にあへばあふほど赤くなる林檎のやうに

ますます温かく燃えあがるらしい  
 はるの土のやうにたくましく  
 たつぷりした實際に恐ろしいほど  
 紅い素のままな地をむき出しにして歩いてゆくのだ  
 風のほうでもみな反れてゆく  
 とてもかなはないらしく

荒い霜だつて

雪だつてすぐ消されてしまふ  
 あの上に手を置いたら大變だらう  
 しかもとつとつとゆくのだ  
 わき目もふらず

そこらぢうの人人をおどろかし  
 ハツキリと美しい姿を目に永く描かせ  
 とつとつと走るやうにゆくのだ  
 あの様子だと何處までゆくかわからない  
 あのを足を見たら大變だらう  
 しまひには天まで登つてゆくかもしれない

私はその紅いのみを見ただけで息がつまる  
 どこから彼塵美しいものが飛び出して来たのか  
 かの女は空気をひき裂いて通つてゆく  
 さかれた空気がしばらく  
 虹のやうにさへなつて見えるのだ

しかもとつとつと天馬のやうに大きく  
大きな足で  
すらりとさやを拂つた槍のやうに  
電車にものらずに行く

### ある制作

もでるが着物をぬいだとき  
なんだか光つたやうな気がした  
なんだかわからない  
引き裂いたやうなものだ  
私はぼつぼつ仕事をはじめた

私はなにもしらない

私は足を二本つくつてゐる  
ふしぎに足が微かにかるく息をしてゐる  
そのために皮膚のうへに波がでてくる  
うろこのやうに整へられた波だ  
それが一つの動きにつれて  
みんな誘はれて  
みんな微かに動いてゐる

左の足をやつてゐると  
右の足がまるで分らなくなつた  
右の足が死んでゐるやうに見えた

左の足をやつてゐると

右が生きかへらない

私は両方を見た

両方とも目にはいつた

二つはとても離れられないもののやうに

両方からびつたりと喰つついてゐる

どれが右か左かわからなくなつた

一つのものかもしれない

そのために私は恥かしくなる

まるでわからないためではない

まるで別なものを私はこねあげてゐるからだ

森とした午後だ

ストオプがかつとしてゐる

友だちがいく人も同じい仕事をしてゐる

もでるの股は張つてゐる

その線はいつか見た海の線ににてゐる

あるやうでないやうな線だ

くもの糸みたいなのやつだ

それがすうと小氣味よく引かれてゐる

實にふしぎだ

人間の肉體でなければあんな美しいものをもつてゐな

いぞと思ふ

びしんと張りつめてゐる

私はこんどは初めからやりなほした

ひと擱の土から  
 いつそ堀り出してやらうとしたがだめた  
 やはり逆もどりした

### 街裏

私はいまでも  
 一人きりになつてさびしい街裏をたづねてゆく  
 そこで静かにさけをのむ  
 誰とも行つたことのない  
 誰にも知らない濕濕した小路の奥で  
 ひとり座つたなりで

野に置かれたやうに長い時間をおくる

さういふとき  
 私は炭のやうな暗いかげを長く  
 壁ぎしまでひいてゐる  
 どす黒く滲んだやうに  
 彫りもののやうに動かないで  
 人氣のない荒い空気を冷たく吸つてゐる  
 あたかも嚴格な叱責をうけたものの首垂れたやうな格  
 構で  
 しかも膝を合して正しい座りやうをしてゐるのだ

つづめて言へば私のむかしの「時間」に  
炭をつかんだやうな過去にあへるのだ  
一人ゐたさに

雨のときはぬかるみにかげをおとして  
ぬかるみを拾ひ歩きして  
うすぐらく

路地のおくをたづねてゆくのだ

そこで私はがりがりとかたべてゐる  
むりに子供のくちへおしこむやうな食べものが私に強  
ひられる

さうしてさけをのむ  
いろいろな人間の心が其處に座つてゐる時みな浮きあ  
がつてくる  
私はそれを考へる

その寒さはさらさらして襲ふ  
ささくれ立つた床や柱が煤ばんでゐる  
きたない女がいつまでも座つてゐる  
心臓のよわいらしい  
蒼白い紙巻のやうにやせた手足をもつた女どもだ  
私はそれらをもしげしげ眺める  
哀憐と憎みとを交ぜた感情で



その葉のやうに乾いた心を眺めてゐる

さういふ時をすごすと  
私はまたぬかるみの路をかへつてゆく  
すこし陰氣になりながら

## 第二の故郷

私が初めて上京したところ  
どの街區を歩いてゐても  
旅にゐるやうな氣がして仕方がなかつた

ことに深川や本所あたりの  
海近い町の

土藏作りの白い家並をみると  
はげしい旅の心をかんじ出した  
しろい鷗を見ても  
青い小波を見ても  
やはり旅にゐる氣がやまなかつた

五年十年と経つて行つた  
私はたうとう小さい家庭をもち  
妻をもち  
庭にいろいろなものを植えた

夏は胡瓜や茄子

また冬は大根をつくつて見た

故郷の田園の一部を移したやうな氣で

朝晩つちにしたらしんだ

秋は鶏頭が咲いた

故郷の土のしたしみ味ひが

いつのまにか心にのり移つて來た

散歩にでても

したしみが湧いた

そのうち父を失つた

それから故郷の家が整理された

東京がだんだん私をそのころから

抱きしめてくれた

麻布の奥をあるいても

私はこれまでのやうな旅らしい氣が失せた

みな自分と一しよの市街だと

一つ一つの商店や

うら町の垣根の花までが懐しく感じた

この都の年中行事にもなれた

言葉にも

人情にも

よい友だちにも

貧しさにも慣れた

どこを歩いてても嬉しくなつた

みな自分の町のひとだと思ふと嬉しかった  
 街からかへると  
 緑で覆はれた郊外の自分のうちの  
 いきなり門をあけると  
 みな自分を待つてゐるやうな気がした  
 どこか人間の顔と共通なもののあるいろいろな草花、  
 いろいろな室のもの  
 カチカチいふ時計

自分がゐるとみな生きてゐた  
 みなふとつた  
 どれもこれも永い生活のかたみの光澤を

おのがじしに輝きはじめた  
 庭のものは年年根をはつて行つた  
 深い愛すべき根をはつて行つた

### 桃

はづか一本の桃の木だが  
 ぼつちりと紅い花をいただいてゐる  
 いつ見ても皮膚が美しく漂うてゐる  
 そつとふれて見る  
 つめたいが好い氣もちだ

## 春の朝

毎朝のやうに温かくなつてきた  
 鳥のうたもきこえる  
 雨戸のそとに温氣と雨がまつてゐる  
 机のうへに愉しい仕事がつてゐる  
 私に好意をもつよい雑誌が仕事をまつてゐる  
 そとでは外室するために電車もまつてゐる  
 晩には會がある  
 少數のよい理解者が  
 私のたづねてゆくのを待つてゐる

そこには拙いが私相應な食事がまつてゐる  
 私は起きなければならぬ  
 雨に會ひ  
 仕事に會はねばならぬ

## 新しい夜

ある會のかへりに  
 もう電車もなくなつたので  
 私は上野のステーションへ行つたが  
 もう最終の列車も出てしまつたあとで  
 しんかんとして人影すらなかつた

ただ待合室を掃いてゐる驛夫のうす暗い姿がむづむづ動いてゐるばかりである  
 ここは疲れたやうな夜で一杯だ  
 ふと氣がつくと

切符賣場の内部はまだ赤赤と點れてゐて  
 まだここは背の口の町のやうな明るさだ  
 驛員と若い女の事務員とが  
 しきりに何か食事をしながら  
 微笑つたり話したりしてゐる  
 女事務員の頬は美事な紅みで  
 みつちりふくれあがつてゐる  
 楽しさうに話してゐる  
 處女らしい羞恥も見える

見るものに懐しげなうつとりした目をもつてゐる  
 金網と硝子戸のうち

ここにはまた明るい暮れたばかりの  
 新しい夜がみなぎつてゐる  
 寝しづまつた世界をそとにして  
 電燈と火と食事と  
 監督者のゐない夜の愉しい事務があるだけだ  
 私はこつそりこれらを眺めて  
 また停車場を出た  
 夜はふけ亘つて街はしづみ切つてゐた

## 雪解

今朝起きると  
めづらしく雪がつもつてゐました  
道理で昨夜はたいへんに温かく  
たいへんに静かすぎてゐたやうでした

わたしのやうに  
深い雪國に幼少なときを送つたものは  
雪をみるとすぐ心がをどり出すのです

人間でないだけにこの自然のあらはれは  
全く久しぶりだといふ氣をおこさせます  
そのまぶしいやうな輝き  
青みの積みかさなつた深さなど  
やはり心では覺えのある感じですぐに懐しまれるので  
す

しかも東京の雪はすぐ消えかかつて  
その午後にもなれば  
障子にかけをおとしながら  
しとしと融けかかるのです  
私はその音を幾度となく文章に書き

詩であらはしはしたが  
 いつの年の冬にも  
 やはり新しい感じできけるのです

私がかつてその音を  
 どこかの爐のあるところできいたことがあり  
 そのころの私は小さかつたやうにおぼえて居ります  
 あるひは郷里にゐたころかもしれない  
 あるひは姉などと一しよだつたか  
 または女のともだちのところに居たのか  
 それとも學校の窓のあたりだつたかもしれません  
 唯そのときの私はうつとりした何か美しいものを思つ

て居たやうであり  
 また美しいものが手に手をとつてゐたやうであり  
 反對に爐火にほてつてすこし上氣せてゐたやうにも思  
 はれるのです  
 私はたのしいやうな氣をおこして考へたことは實際で  
 す  
 いまそれを手繰つて考へれば考へるほど  
 たしかな想念に辿りつかれないもどかしさを感じま  
 す

しかしそれらのきれぎれな思ひ出にまつはりながら  
 雪解の音がのんびりとしてゐたことだけ

はつきりと今日のやうにきこえるのです  
しづかでゆつたりしてゐて  
上野あたりのさくらなどのことも  
妙に考へられてくるのです

### マヤ夫人

朝

むかふの家の目白や雲雀が  
いつになく温かい野の囀りをしてゐるのを  
うつとり聞いてゐると  
そこへゴヤのマヤ夫人が到いた

その大版の寫眞版をひらくとき

これがパリの街から船へ

しかもこの田端まで着いたことを珍らしくかんじた

その包みのなかには

美しい美しいマヤ夫人が裸體のまま

美しいの大きい瞳をひらいて

すらりと足をのばして

しづかによこにねてゐるのが眺められた

裸體がもつ羞恥の美しさ

そのわりあひに瘖せたかつちりした美しさ

いつまでも残るすぐれた美しさを



私はながくこの朝見つめてゐたのだ

生きてゐる崖

そこは枯れ草で一杯だ  
 無限に温かく藁小屋のやうだ  
 一つ一つの枯れ草は火のやうに乾いてゐる  
 筋ばかりになつてゐる  
 日あたりのいいこと全で蒸風呂のやうに  
 ひる間そこを散歩するといひ氣もちだ  
 けれども風が落ちてくると  
 ふしぎに筋ばかりの枯れ草が

みな一様に鳴る

それはか弱い悲鳴に似てゐる  
 一枚一枚のざらざらした枯れ株に  
 風が堰かれたりこされたりするのだ

それらのよく焦げた色は美しい  
 限りなくいやみのないほど美しい  
 ていねいにやさしい自然が  
 みないちやうに行き亘つてゐる  
 それを掴んでみると火のやうな氣がする  
 火が火にならない前に  
 ああいふ姿をしてゐるやうにおもはれる

骨ばかりの美だ

枯れ草の這ふた崖の上

大きな枯れ込み、小さな株

まだしつかり立つたままの精力でゐるやつ

それから磨かれた優しいひとむれ

そこにひとりでに段段があり

やさしい子供なれば登ることが出来るやうになつてゐる

そのてつぺんに家があり

櫻の枯れたのがある

さうして總てが青空をいただき

そのうへ一杯の日光をうけてゐる

この全景をながめてゐると

そこにみな春もあるやうな気がするのだ

季節を別けなくともいい気がする

此處には一切の四季のもの

あるだけのものがあるからだ

枯れ草が陽炎の工合でみな巻きあがつて見える  
妙にすばらしく

その優しい崖の全景

特別に養はれてゐるやうな親しい崖の全景

わたしはたいくつすると

いつも其處をあるくのだ

何かあしもとから囁かれる気がする

水蒸氣のやうな温かいやつが  
 きいたことのない言葉で何かいふのだ  
 それが本當にいまはきこえてくる  
 田端の停車場で下りると右のほうに  
 その暖かい大きな毛皮のやうな  
 むしやむしやした崖がある

### 子供の世界

そこは鐵道の踏切の土手を中心にして  
 一面のあをあをした杉菜が生え  
 つくしが立ち

また柔らかい食べられさうな草が  
 ところどころの丘をつつんで敷いてゐた  
 どこかの小學校の女生徒が  
 教師につれられて一様に  
 きちんと並んでゐたのが  
 教師の號令にしたがつて一時にぱつと散りはじめた  
 花でも散らしたやうに  
 一つの蕊をまんなかにして八方へ散つてゆく小さい女  
 の生徒らの  
 一どきに擧げた高い聲が  
 そこらに蛇のやうに起つて行つた

## 三四人づれや

また多人數の一とかたまりや  
それら彼女らのからだに ついた紅い部分  
白い足の部分

また鮮やかな小さな花のやうな顔

さういふものがその土手ににじりつけたやうに  
あちこちに寝ころんだり

一つの輪になつたりしながら

たえまなく轉つてゐるのが

まるで繪であらはしたやうに映つてきた

さうかと思ふと一と群の腹の紅い渡り鳥のやうに

おほかた鬼ごつこでもしてゐるのだらう

急にばらばらになつて飛び出すのや

## 轉ぶのや飛ぶのや

その間に小川があり

それらがちらとうつつては消えて行つた

なかに群をはなれて

ぼんやりと寂しさうな瞳をした子が

一人で草のあたまをむしりながら

女の子らしく野にゐてもきちんと坐つて

餘念なくみんなの遊ぶのをちつと眺めてゐるのがあつ

た

その目はやや青く大きく

しかもすぐ俯向きやすい寂しい光をつつんでゐた

あまり青すぎると思はれる位な顔いろは  
草の反射でもうすあをくさしてゐるのか  
彼女はしづんで  
おなじい草のあたまをむしり  
むしりながら永く坐つてゐた

そのとき教師が呼子を吹くと  
それらの散らばりつくした花びらが  
またどつと一つの蕊をまんなかにして  
美ごとと一つの輪廓に正しくをさまるのであつた  
併しあの子はどうしたか  
さう思つて見るといつの間にもやら

立つてやはり群れのなかに入つて行つたらしく影すら  
なかつた  
ただ一つの不調和なツメ襟をきた教師を中心にして  
美しい行列が町の方へだんだん歩いて行つた  
杉菜の土手をうしろにしなから  
のどかな春の日のしづみゆく方に向いて

## あ る 日

いつも下りる坂が  
けさはすつかり温かさが上つて  
うすい桃いろに枯草がそよいで見えた

いろが異つたなと思つた  
そつと覗くと青いやつが出てゐるらしい  
濡めつた土がぼかぼかしてゐる

### 春 さ き

田端は田舎である

藁、枯草、煤煙、砂ほこりなど  
みな温かさうにこんもりとする春さき  
すぐ近くの女理髮人の店さきを通ると  
その硝子戸の内に  
おかみさんのよこがぼが

にくらしく桃色にけふはことさら上氣してゐるのが見  
える

かなりな年ごろであるのに  
まだぼつたりした肉つきがある  
すこし亂れた髪や  
菜の花を活けてあるのや

そとの乾いた入口の泥さへ  
ぼろぼろになつて温かさうだ  
道路には紙きれ、藁くづ、みかんの皮  
三人ばかり固まつた日南くさい子供らの  
なまなましく白い脛など

やさしく光つて見えるのだ

櫻の多い田端の村

破れた垣根の多い村

此處をあるくごとに私の地盤

仕事の地盤がここで固められたことを考へ  
さうして懐しさうにして歩く

### ○ 寂しき瞳孔

ある晩私は曲馬を見にゆきました

なにかしら少年時代に見残したゆめが  
そこに愉しく青青と燃えてゐるやうな気がしたからで  
す

言葉で現はせないものが  
そこへ這入らなければ見られないものがあるやうな氣  
がしたのです

いま七つばかりの支那人の女の子が  
しきりに藝當をしてゐました  
そのぐなぐな肢體を左右に折れ歪げたり  
あるひは一疋の蟹のやうに横這ひをしたりしてゐまし  
た

だんだん藝が進むと  
彼女はふりかへつて

自分の頭をも足と同じい地上に置きました  
またこんどは次第に俯向いて行つて

足と足とのまたのあひから

その支那の少女らしい顔を擡げました

私はそのときあまりの惨酷さに目をそむけました

彼女のからだは

まるで昆蟲と同じいやうに

自由に伸びたりちぢんだりしました

しまひには其處に絶えずついてゐて懸け聲をしてゐる

小者が

彼女の四つ這ひになつたなりのからだを

まるで一疋の犬か何かのやうにかろがると掴みあげた  
りしました

それから曲馬を見ました

みな若い花のやうな女性で

びつたりとからだに合つた肉褌袴をきてゐました

それがぐるぐる圓を描いて走る馬上に

立つたり横這ひになつたりすることに

肉いろのシャツが肉體の肥つた隆起を

實に誘惑的な感覺のもとに

美しい曲線の限りをつくりました



私は最後に五六丈もあらう高い天井の一枚の板の上で  
 しかもその尖端で立つたり坐つたり  
 寝ころんだりした懶巧げな  
 品のある澄んだ目をした少女を見ました

彼女がその高い天井の板の上で  
 美しい長いすなりとした足を立たせた姿は  
 その胸部のやさしい高まりや  
 濃いつやのある束ね髪の端まで  
 實にすつきりと彫つたやうに立派でした  
 それに注意すべきことは

彼女がただのいちども微笑しなかつたことと  
 いつもある一點を凝視てゐたことです  
 娘らしい威厳と光ある瞳孔を  
 高慢な上品の内にはあらはしてゐたことです  
 ときには匿しきれない冷やかな嘲笑が  
 たえずそのほそ面の頬の上に  
 いつも人人にさとられない程度で  
 しづかに浮いたり消えたりしてゐました

私は彼女をぢつと見つめてゐると  
 私の胸部に彫りつけられたやうな勇敢さと  
 たえまなく馬鹿にされたやうな氣持とを受けました

人は高い處に登つてゐると  
 一種の超自然的な精神を味覺するものであるが  
 彼女もきつと高きに登つて  
 いま總ての看客がばかしく見えたかもしれません  
 しかも無益な拍手や嘆賞の叫びは  
 彼女にとつて見えすいた寂しいお世辭に過ぎなかつた  
 しかも彼女は一つ一つと藝を進めてゆくうち  
 靜かな落ち着きを人人に印象させました

私はいつだつたか  
 どこかでああいふ目をした女性に  
 いつか會つたやうな氣がしました

非常に高い階級の女のもつやうな高慢さと  
 その澄んだ美しさです  
 あの上品な蒼白い容貌を見つめてゐるだけでも  
 心がしづまりかへります  
 沈痛な美が泉のやうな心に湧き上ります

彼女は板の尖端につかまつて  
 美しい足をそろへて  
 空中にびんとつつ立てました  
 なにもものでもこの美しさにたぐへられない  
 なにもものも有たない美です  
 私は板のはしにすえられた不自然な彼女の顔を見てゐ

るとき

あまりの熟練さの立派なのに  
心で賞讃の叫びをあげました

間もなく彼はみだれがみを掻きあげて  
天井でしばらく休んでゐました  
その目はすこしの微笑をふくまずに  
じつと何か考へてゐるやうな深さを見せてゐました  
何もかもあの目のうちに含まれ  
そして物語られてゐるものがあるやうな気がしました  
私は彼女のかたはらに寄りたく思ひました  
その瘠せた肩に手を置きたく思ひました

### 竹を植える

わたしは窓さきに篠竹を植えた  
窓さきがあまり淋しかつたからだ  
篠竹は實にいい姿をもつてゐる  
伸びあがつた小さい枝から  
二枚あるひは三枚の光をふくんだ葉を  
ひらりひらりと泳がしてゐる  
そらに透いて  
すつきりしたいいい姿をもつてゐる

そこに障子がしまつてゐる  
 それに實に機嫌のよい姿をうつしてくる  
 障子のしたにすぐ私の机がある  
 朝、つづきものの仕事にかかるとき  
 さやさやと囁やいてゐる  
 湯わかしは温かにのぼつてゐる  
 障子のそとまで上野あたりの砂ほこりが来る  
 花どきの市街のさわがしい音が  
 遠い蚊柱を夕がたにきくやうな氣がする

篠竹がときをり障子をさやさやとなでる。はつとする

一瞬にわたしは女がきたやうにはつとする  
 しかしそんなものが來やうはづがない

## 冬の婦人

電車のなかなどで  
 あかぎれのきれた婦人の手を見ると  
 私はすぐに目をそらしてしまふ  
 さらさらした寒さが襲つてくるのだ  
 きさんだやうな暗さが荒くよせてくるのだ  
 婦人だちのあらい水仕事は  
 きつと手をあれさせるに決つてゐる

ひとつはやはり生活と戦つてゐるからだ  
 直接に生活の心にふれてゐるからだ  
 さうわかりながら痛痛しく私は目をそらしてしまふの  
 だ

なかには吹きさらしの寒風に  
 もう手のかたちさへなくなつて  
 冷たくぬれた老蝦のやうに  
 やつと節と節とがつながつてゐるのさへある  
 それを見つめてゐるとふしぎに私の心まで冷たくなつ  
 てくる  
 氣の毒だと思ひ

よく働いてゐると思ひながら  
 つぎの瞬間私は冷たい目つきをしてそれを見まいとす  
 るのだ

そこには幸福も凍えあがつてゐる  
 温かさがみな上發してしまつてゐる  
 あるものは惨たらしいしやこのやうな  
 むづむづと冷たい歩みをつづける田舎のさかな屋の石  
 たたみに這ふ  
 あかちやけた心臓のないやうないやこだ

ある日客があつて  
 婦人は手を見れば美しくあるかないかが解ると言つて

わた

自分は決して手のきたない婦人をもらふまいと言つた  
 そこへ家内が茶をもつて出て来た  
 私はひいやりとしてその手を見た  
 あかぎれはきれてゐないが  
 しかしやはり紅くなつてゐる  
 私はいく疋となく連れをこさへた蠶のやうな指を  
 どこかで見してきたことをおもひ  
 目をふせて火鉢の灰をながめて  
 すこし沈んだ氣になつた

暗さはたてからもよこからもくる

冬をおしとめることができないやうに  
 よごれる手を拭ききよめられない  
 冷厳な冬のたましひの底にふれて  
 きざまれる婦人の手を決して批難はできない  
 けれども寒くなる  
 氣を荒くしてくる

### ある日の錯覺

しづかな晩、私はじつと一つの星を  
 見つめてゐると  
 それが矢のやうに降つて来た

私はそれを避けやうとして  
うしろへ二三歩さがると  
いきなり私はからだがいちみ出した

私は朝になると

庭ぢうをさがしはじめた

星の墜落したあとがあるにちがひないと  
垣のあたりから

木いちごの繁みから花壇から

殆んど隈なくさがしたけれど

小石のおちたあとすら見つからなかつた

實際私は落ちかかつた光りが

私にあつたにちがひないのだと

からだぢうをしらべ初め出したけれど

一つのかすり傷すらなかつた

私はいろいろ考へた

あの星のうちに地球の何万倍のやつがあるといふこと  
を知つてゐた

星が地球に落ちたら大變だといふことも知つてゐた

しかし私はどうしても疑へなかつた

たしかに一つの星が

矢のやうに落ちて來たのだ

私は庭をまたしても探りはじめた  
 しかしどの繁みにも星らしいものがなかつた  
 私はぐたぐたにつかれた  
 私はあたまに熱をかんじた  
 しかし私はやめなかつた  
 小さな小石や、落葉のあいだなどを  
 みな叮嚀に見てあるいた

私はそのとき一つの小さな  
 指さきほどの穴を見つけ出した  
 私はそれを犬のやうに嗅ぎ

犬のやうにその穴を掘りはじめた  
 穴のなかは暗い冷たい深さをもつてゐて  
 かなりな長さをもつてゐた  
 私はだんだん掘りはじめた  
 穴のなかは暗い冷たい深さをもつてゐて  
 かなりな長さをもつてゐた  
 私はだんだん掘つてゆくと  
 間もなくなかから一疋の蟬が這ひ出した  
 そのブリミチブな土色の姿は  
 まるで兜で鎧ふたやうに  
 しづかに時をきざんでむづむづと這ひ出した  
 私はぼんやりそれを見つめた  
 見てゐると頭がはつきりし出した



### 木から落ちた少年

少年はいつも庭の樹のてつべんに登つて  
 杏の實をがりがり喰べながら  
 すぐ隣の庭を見てゐた  
 樹のてつべんは緑が深かつたから  
 その小さいからだが見えなかつた

それがいつも晩方にかぎられてゐた  
 木の葉をゆする涼しい風の中に

少年はからだをあつくして  
 しつかり梢にしがみついてゐた  
 何のためにかれが家のものから匿れて  
 ああして永い間樹の上にいるかが分らなかつた

少年はだんだん蒼白い顔をして行つた  
 その神経質にびりびり震へてゐる手には  
 いくらか不安と恐怖とを交へて  
 梢のさきまでつたはつた  
 しかも毎日登つてゐたために  
 かれの手近には  
 杏の實がすつかり食ひつくされてゐて

手のとどかないところに  
まるまるとこがねいろをして美事に實つてゐた

風はさわやかに毎日  
木の葉を渡つて波のやうに揺つた  
からだの小さい少年は  
すこし大きな風だと  
梢と一しよにゆすられた  
まるで不自然な大きな果實のやうに  
ゆらりゆらりと揺れてゐた

ある夕方

静かな土の上に  
大きな地ひびきを立てて落ちたものがあつた  
家のものがみな出て見た  
するとかの少年が小さな梢の折れたのを一本しつかり  
と持ちながら  
蒼白くなつて窒息してゐた  
何のために少年が木から落ちたのかと  
よくしらべて見ても分らなかつた  
ただ木の實をとりを上つたのだらうと  
家のものが言ひ合してゐた

となりの庭では

この少年が木に登つてゆくころには

青い垣根のゆふがほのそばで

白い芳はしいからだをむき出しにして

十九になる娘がしきりに行水をしてゐた

くつきりと白い大理石のやうにそれが此方から見られ  
た

### 寂しき印度人

自分はよくその印度人を見た

ときには夜の街區の埃にまみれて

バナナを賣つたり

たくみな日本語をつかつたりしてゐた

自分はその容貌の黒漆な深みから

いつもまだ見ぬ國土の自然を考へた

熱帯の幽遠な氣は自分をとらへた

さびしく豊富な樹木の世界が視野に廣がつた

自分は廣小路のカフェエで

彼れが晩などよく酒をのんでゐるのを見た

女中などにしきりになぶりものにせられながら

他の酔つた人人から

不愉快な目で眺められながら

下卑た微笑をもらしながら  
しきりに飲酒に耽つてゐるのを見た

酔ふとかれは橙色の十圓紙幣をとり出して  
女中達にひらひらさせて見せた  
そして今から遊びにゆくのだと言ひ  
あたたかい女にふれるのだと言ひ  
嬉しさうに人人をばかにした調子で言つた  
女中達はみな冷かした  
あるものは彼れの肩を小衝いたりした  
しかしそれは明らかに橙色の紙幣が  
彼れの手にはひらひらした瞬間から

みんながすこしあて人間あつかひにしたのであつた

自分はそのありさまを見てゐて  
どうしても自分達とは通じかねるものが  
かれとの間にあるやうな気がした  
かれはこの寒い日本に  
しかも異國の人人のなかにあつて  
どれだけでも寂しさうにしてゐなかつたが  
しかし時時  
きうに黙りこんでぼんやりしてゐた  
ひどい罵りの聲をうけたときや  
極端な大きな嘲笑をあびせかけられた時にだ

自分がかれが微笑ふごとに  
人のよいところと

非常に深いずるさを見た

その人のよいところは豊饒な自然のなかに  
ひととして育つた彼れを見ることが出来た  
人のわるいところは

みなこの日本に来てからのやうに思はれた  
それはあまりに日本人らしく  
猿のやうだつたから

自分は夏の暑くらしい廣小路の埃の中で  
やなぎの並木のしたで

バナナを賣つてゐる彼れを見るとき  
かれが本當のことをしてゐるやうに思はれた  
バナナを選びわけたりする手捌きは  
かれの幼年時代の或るひと時を思はせた  
いたいな少年としての彼れが  
あの熱帯の自然にしたしんでゐたころを  
私にしきりに聯想させた

私がかれの右の中指にはさまつてゐる

めつきの指輪さへ

妙に寂しいものに見えた

305  
沃土の一片のやうな指の色に

こがね色をした金属の光さへ自然らしい  
極めて調和のとれたもののやうに見えた  
自分はいつか彼れと話したいと思つた

### 自分と彼

きりぎりすが深くさむらの  
日の光がちらちらと漏れる中で  
しづかに啼いてゐる  
自分はそつとくさむらに近づいた  
自分はきりぎりすを捕へやうと思つた

きりぎりすはよく啼き立つてゐた  
あたかも自分だけの世界のやうに  
深い大空にまで  
輝きわたるやうな聲で

私はそつと自分の手をくさむらに入れた  
自分の手は大きかつた  
だんだん近づいて  
きりぎりすの羽の震動が指さきにまで  
ひびいて來るところまでゆくと  
その瞬間私は自分の手が急に醜く感じた

その大ききから  
青春をとほりこした手につやのないことや  
美のないことをつくづく感じた

くさむらの内部はしんとして  
きりぎりすの青い目だけが光つてゐる  
その目はうごかず  
じつと自らのうちにあこがれ耽つてゐるやうに  
おそらく幸福な限りをつくしてゐるやうに  
四枚の羽がたえず  
うたをうたつてゐるのだ

私はまた叢に覗きこんでゐる自分の顔が  
いま實に大きく  
しかも醜く感じた  
決していま自分の相貌に美のないことや  
ちひさな欲望に充たされてゐることを  
ありありと感じ出した

くさむらの内部はしづかだ  
日光はぜいたくに注がれてゐる  
すべてが今彼女のうたふに適してゐる  
そよ風すら彼女をさまたげない

## みな美だ

私は心にイヤなものを感じた  
 自分の心のさびしさ貧しさ耻しさを感じた  
 私はだんだん手をひいた  
 私は音をさせないやうにして叢をはなれた  
 決して彼女を捕へまいと思つた  
 私はだんだん野をはなれた  
 そのうしろから彼女がうたつた

## スケツチ

清い朝だ

緑の朝焼けが地上を流れてゐる

澄み切つてゐる

地上のものはみな登つてゆく

天に登つて

熱情に燃えてゐる

子供らの行列をはじめ

車馬物賣らも勇ましく行く



## 日日の思ひ

あの凝固した幹から  
 美しい花實の生れることのいみじさを  
 つくづくいま考へる  
 立ちかはり新しくされ  
 つきない意志のあらはれをありあり考へる  
 蒼茫した世界のなかに  
 彼らのいつも絶えない思ひを受ける  
 かれらはたえることはないだらう  
 いつも美しいであらう

なんでもないことであるが  
 いつも自分の胸をととのへてくれる

## 朝

雨戸の隙間から  
 もう朝焼けのはじまつたのが窺はれる  
 潔よくめざめた私の室に  
 いちはやく  
 呼びさましにくる朝  
 あさやけの輝やかしげな紅  
 とりの啼きこゑ

どこかだがたびし戸を繰る音

女らの話してゐる聲

それが小鳥によく似てゐる

わか芽の匂ひ

土のしめつた匂ひ

その落着き

間もなく花のやうに日がひらく

# 目次

## 「抒情小曲集」

小景異情	その一	三
小景異情	その二	四
小景異情	その三	五
小景異情	その四	五
小景異情	その五	六
小景異情	その六	七
旅途		七
京都にて		八
流離		一〇

寺の庭... 二二  
 旅 上... 二三  
 三 月... 三三  
 足羽川... 三四  
 ふるさと... 三六  
 厚 川... 三九  
 しぐれ... 三九  
 哀 章... 三九  
 わかれ... 三九  
 雪くる前... 三九  
 朱き葉... 三九  
 山にゆきて... 三九  
 礫石に書きたる詩... 三九

秋の終り... 三四  
 煙れる冬木... 三五  
 大乘寺山にて... 三七  
 都にかへり来て... 三七  
 はつなつ... 三八  
 蟬 頃... 三九  
 並木町... 三九  
 銀製の乞食... 三九  
 天の虫... 三九  
 上野ステュション... 四〇  
 苗... 四〇  
 植物園にて... 四〇  
 郊外にて... 四〇

室生犀星氏 …… 二六  
 ある日 …… 二七  
 坂 其一 …… 二八  
 坂 其二 …… 二九  
 断章 …… 三〇  
 道 …… 三一  
 酒場 …… 三二  
 街にて …… 三三  
 夏の國 …… 三四  
 二つの瞳孔 …… 三五  
 朝ぞら …… 三六  
 郊外にて …… 三七  
 寂しき椅子 …… 三八

十月のノオト …… 三九  
 合 掌 其一 …… 四〇  
 合 掌 其二 …… 四一  
 合 掌 其三 …… 四二  
 合 掌 其四 …… 四三  
 合 掌 其五 …… 四四  
 合 掌 其六 …… 四五  
 古き毒草園 「序詩」 …… 四六  
 香爐を盗む 「序詩」 …… 四七  
 萬花鏡 「序詩」 …… 四八  
 春の寺 …… 四九  
 魚 …… 五〇

(以上抒情小曲集抄)

「朝夕の歌」

はる……… 六九

櫻咲くところ……… 七〇

万人の孤獨……… 七一

万人の愛……… 七二

朝の歌……… 七三

夕の歌……… 七四

未完成の詩の一つ……… 七五

犀川の岸邊……… 七八

故郷にて冬を送る……… 八〇

しぐれ……… 八二

永遠にやつて来ない女性……… 八三

雨の詩……… 八六

愛あるところに……… 八七

よく見るゆめ……… 八八

また自らにも與へられる日……… 九一

この喜びを告ぐ……… 九二

この苦痛の前にぬかづく……… 九四

この道をも私は通る……… 九七

街と家との遠方……… 九八

美しい晩にかいた詩……… 一〇一

燭の下に人あり本を読み……… 一〇三

永久孤獨な自分……… 一〇六

ドストエフスキイの肖像……… 一〇八

良きもの深きもの……… 一一一

自分の使命……………二四  
 父なき後……………二五  
 門……………二三

(以上愛の詩集抄)

「自分の本道」

自分の本道……………二九  
 永久に……………三三  
 散歩……………三三  
 小さい家庭……………三三  
 春の開始……………三三  
 恵みを受ける……………三三

若葉は燃える……………一五  
 寂しき日……………一五  
 郊外の春……………一五  
 心の遊離……………一五  
 よき友とともに……………一五  
 ある日……………一五  
 ある日……………一五  
 坂……………一五  
 露西亞を思ふ……………一五  
 音楽會の後……………一五  
 ある夜のこと……………一五  
 夏の日の思出……………一五  
 ノオト……………一五



地上の春	……	二二五
春の雪	……	二二八
苦しみ悩み	……	二三一
冬の晩がた	……	二三三
寒土	……	二三四
毒矢の立つた花	……	二三五
心	……	二三六

「第二の故郷」

鮑	……	二三一
地に燃える	……	二三二
ある制作	……	二三〇
街裏	……	二三四

第二の故郷	……	二四六
桃	……	二四九
春の朝	……	二五〇
新しい夜	……	二五二
雪解	……	二五三
▼ヤ夫人	……	二五六
生きてゐる崖	……	二六三
子供の世界	……	二六四
ある日	……	二七三
春さき	……	二七四
寂しき瞳孔	……	二七六
竹を植ゑる	……	二八五
冬の婦人	……	二八七



ある日の錯覚	………	二九二
木から落ちた少年	………	二九六
寂しき印度人	………	三〇〇
自分と彼	………	三〇六
スケッチ	………	三一一
日日の思	………	三二二
朝	………	三二三

——裝幀 恩地孝四郎氏——

室生犀星詩選

定價 貳圓貳拾錢



大正十一年三月十五日 印刷  
大正十一年三月十五日 發行



著者 室生犀星

發行者 聯合スル代售

發行者 北原鐵雄

東京市神田區榮樂一丁目一

發行者 鈴木泉藏

東京市神田區榮樂一丁目一

印刷者 山本源太郎

東京市小石川區久盛四丁目五

製本金子

發行所

東京市神田區  
仲藏樂町一五

聯合  
代售

ア  
ル  
ス

電話九段二一六九番  
振替東京二四八八番



北原白秋著 白秋詩集 第一卷  
定價 貳圓八拾錢  
書留送料 拾七錢

北原白秋著 白秋詩集 第二卷  
定價 貳圓八拾錢  
書留送料 拾七錢

北原白秋著 白秋小唄集  
定價 壹圓八拾錢  
書留送料 拾參錢

北原白秋著 抒情小詩 わすれなぐさ  
定價 壹圓八拾錢  
書留送料 拾參錢

北原白秋著 民論集 日本  
の 笛 近 刊

北原白秋著 歌集 雀の卵

定價 參圓八拾錢  
書留送料 貳拾七錢

北原白秋著 歌話 洗心雜話

定價 壹圓八拾錢  
書留送料 拾五錢

古泉千樞編

正岡子規  
歌論集

竹里歌話

定價 貳圓八拾錢  
書留送料 拾九錢

菊地寬著

文藝往來

定價 壹圓六拾錢  
書留送料 拾參錢

北原白秋著 白秋詩集 全二卷

定價 各貳圓八拾錢  
書留送料 各拾七錢

北原白秋著 白秋小唄集

定價 壹圓八拾錢  
書留送料 拾參錢

上田敏選註 小唄

定價 壹圓八拾錢  
書留送料 拾五錢

北原白秋著

繪入  
童話

とんぼの眼玉

定價 壹圓九拾錢  
書留送料 拾五錢

北原白秋著

繪入  
童話

兎の電報

定價 壹圓九拾錢  
書留送料 拾五錢

北原白秋著

英國  
童話

まざあ・ぐうす

定價 貳圓八拾錢  
書留送料 拾七錢

三木露風著

繪入  
童話

眞珠島

定價 貳圓八拾錢  
書留送料 拾七錢

德永壽美子著

童話

薔薇の踊子

定價 壹圓八拾錢  
書留送料 拾參錢

高倉輝著 三部曲 女人、焚殺

定價 貳圓八拾錢  
書留送料 貳拾壹錢

塚原健二郎著 ある迷宮の舞踏者

定價 貳圓六拾錢  
書留送料 拾九錢

山本鼎著 美術家の欠伸

定價 貳圓  
書留送料 拾七錢

若山牧水著 静かなる旅をゆきつゝ

定價 貳圓五拾錢  
書留送料 拾七錢

重徳泗水著 佛蘭西文化の最新知識

定價 貳圓  
書留送料 拾五錢

506  
35

12.8.28

終